地球

『新墾』62-1号

いづ方へわれら人間の滅びゆく地球の円型寡黙に信じ

若者が席占めてより息苦し二階立てバスの平和なる危機

眠りよりふかく目覚めし秋の宵嗚呼こつこつと人らゆき戻る

つひのおぼろとなるまで見てゐる茜空滅びむ日までしたたかに生く

無言電話に応へゐる愚かさもむしろ愉しくうすき胸張る

あまりにも　『新墾』62-2号

複雑にかつ単純に仕組まれて人間は人間の営みの中に疲るる

ゆゆしき念ひにあれど帳じりを合はすひと生の算段もなし

余りにも月の澄みたるすがしさや双掌に享けて運ぶ箇所なし

すがすがと真冬の水ふふめばやうやくわれに高まる自負とふもの

冬ながらま昼するどき陽が届きつららは脆く長形を喪ふ

小寒大寒

『新墾』62-3号

みづからのこころ癒やして立つべしや大寒の前にはだかる小寒

冬雲のちぎれたるは瑕の破片不自由となるまで自由であらな

冬の野は夥しきばかり雪しまく母より父に堕ちゆく記憶

雪に明け雪に暮れゆくわが生きに遺す無名もひとつの華やぎ

均衡とふちからつくづく洩れやすくあくがれ持ちてスーブ啜りぬ

冬の河　『新墾』62-4号

針供養針の幾千弔ふとも未来に向くるすべすでに持たざり

悔ゆること數々遺す世の日々の濯ぎて流す河も凍てたり

まろまろとややに冷えゆく夜の桃ひとのひとりも馭しがたくゐる

塗り潰し過去とふ闇に入りゆきて戻らむための光りを手探る

思ひたち遺さむものを見繕ふあしたの棚にひかる鍵束

春の埃　『新墾』62-5号

雪洞の灯に翳る眼の切れ長の男雛女雛も齢ふりにけり

事勿れ上主義貫くも疎ましくまばたく一瞬を闇にまぎらす

生き遺るるも誤算のひとつ確かなる未来のあのありと見えての惨

透明に晒されながら昇りゆくエレベーターの中の幾人と死の同伴

春の夜の長き祈祷に跪く膝に加はる重みに堪へむ

桜花のかたはら

『新墾』62-6号

やがては散る桜花憂ひてかたはらに身を置くときの花びらの声

灯も絶えてかすか仏間に月の射す死者との距離もかかる明るさ

死の方向生の方向も持たざれば空にこぶしの開くおびただしさ

みづからを締めるばかりに箏を弾く今生の音を待ちながき死よ

雨とは言へ粒よりの大雨しきりなり貴方の過去にやうやく辿りぬ

川　『新墾』62-7号

泥つやに輝く球根亡母もわれも咲かせそこねの喇叭水仙

雨しぶき走れる川の鋭くて結ぶすべなし孤独と孤独

戻されてつひの決意を鈍らせる料金不足の速達封書

さほどなる風とおもはねど雛芥子の揺れゐる向きに歩を返したり

思ひつきカットせる髪の颯爽と出会ひがしらにアカシヤの花

はつ夏の耳

『新墾』62-8号

諾へぬ言葉貧しきはつ夏の双つあるばかりにわが地獄耳

問はれても言ふべきならぬひとつ事重ねゆく日の雨の紫陽花

ものごとのけぢめ徼しきさがに生れふたぎたき念ひの双つ耳

みなづきの水に漱がるる二枚舌行末の身は美しく病む

出るでなく退がるではなくてこの位置に引くは老いへのスタートライン

夏点景　『新墾』62-9号

小さくてまこと昏らきもの譬ふれば蟻の咽喉さし覗くとき

水甕に打たす夏の雨滴にて調べしづかに促すものあり

夏薔薇のいつぽん立つゆゑ魅かされむ焦らずわれの孤独埋めて

今日とふ刻とはに還らざるとも点しおく渡り廊下の裸電球

カーネーション白であることの歓びは真闇にそのひともとの浮き立てる

葡萄　『新墾』62-10号

幸せの想ひ出綴る指先になかなか止まらぬ神様トンボ

葉雑頭は別れま際の庭に炎ゆいくよかけてのわが舌足らず

鈴なりのかなしみあらばかく冥む房なす葡萄のたそがれの秋

みづからを責めて責めぬく冷めたさと真夜のむ水はなづき貫く

胡麻

『新墾』62-11号

何いろにも染まらぬわれが陽焼けして山くだるときの谷間の色

方向の定まらぬままに歩を運ぶ生きゐるかぎりのわが天秤座

累々と灯らぬ窓は夜の久落おびただしき高層の人間不在

さやさやとコスモス揺らぐあるときは風にあるときは身のひもしさならむ

亡母よりも少し不器用に胡麻を煎るその手がしかと明日を示唆す

十月の鎮魂　『新墾』62-12号

拡げたる双手いつぱいに風掬ふ死者もまぎれ来よ十月の原

十月の大安吉日たれの婚コスモスの揺れの抑へがたり

白萩のこぼるる径に蹉きぬやさしきものを踏みしばかりに

つづまりは平隠を希ふひたすらよ香気ただよふ薔薇窓に瞑り

かろき嘘も少しまじへて美しくひとと訣れむ秋のあかつき